（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

三浦市立岬陽小学校

研究テーマ：「自分らしくいきいきと表現する子」～伝えたくなる場・かかわりづくり～

１　実践の目的

平成３１年度まで、「自分の考えをもつ・伝える・深める」という研究主題のもと研究を行ってきた。「①自分の考えをもつ、②自分の考えを伝える、③自分の考えを深める」という３つの過程を意識した授業を実践してきた。自分の考えをもち、友だちと考えを伝え合い、考えが変化、強化、深化することができることを目指し、子どもが自らの考えを「深める」ための具体的な手立てを考えた。研究授業では、特に自分の考えを「もつ」「伝える」の場面に手立てを講じることにより、「もつ」「伝える」の往還する学習過程の中で、個や集団の思考が「深まる」ことを共有することができた。その一方、自分の考えをもつことができていても、伝える場面に課題があり、伝えたいことはあっても考えがうまく伝わらずに、集団の思考が深まらない場面も見られた。「伝え方が分からず、うまく表現（伝え合い）ができなかった」「うまく話せないが、ノートには自分の考えを言葉で表していた」「正解を待つ姿から、『これもいいんだ』と友だち同士のかかわりから自分なりの求め方を見つけようする姿が多く見られるようになった」「言いたい、やりたいという子はいるものの、遠慮してしまう子が活躍・表現する場を作っていきたい」「一人ひとりのつぶやき、発言からどんな考えをもち、どのようなや過程にいるのか、どのような手立てを講じていけるのかを考えたい」などの子どもの実態や教員の思いを共有した。

以上を踏まえ、令和２年度から、「自分らしくいきいきと表現する子」という研究主題のもとで進めていくこととした。（１）「なぜだろう？」と自ら問い続ける姿、（２）「こうしたい！」と自分なりの目標を持って、考え続ける姿（３）「やってみよう！」と表現する姿という３つの視点を意識して、子どもの見取りをしていく。また、子どもが自分らしくいきいきと表現するための教員の手立てを「①一人ひとりが表現したいという思いを育めるような単元づくり・授業づくり」、「②個々の思いを伝え合うための教員の子どもへのかかわり」とし、場を設定したり、手立てを講じたりして、個と全体の子どもの姿を具体的に見取りながら研究授業・協議会を行い、「自分らしく　いきいきと表現する子」の育成を目指していく。

２　実践の内容

授業の中で子どもの思考を見取ることは難しい。思考は表現されることで見取ることができる。また、他者とかかわりながら表現していく中で思考が深まっていく。

子どもの姿に注目しながら授業を見ていけるように３つの視点を設定した。どの視点で子どもを見取るかを指導案にも明記しながら、場を設定したり、手立てを講じたりしていく。個と全体の子どもの姿を具体的に見取りながら単元構想・研究授業・研究協議を行い、「自分らしくいきいきと表現する子」の育成を目指していく。

【視点①】「なぜだろう？」と自ら問い続ける姿
【視点②】「こうしたい！」と自分なりの目標を持って、考え続ける姿
【視点③】「やってみよう！」と表現する姿

研究授業では、授業者が描く「子どもがいきいきと表現する姿」をもとに単元を構想する。これをもとに授業の中で子どもを見

取り、研究協議会では、３つの視点を中心に協議を行い、子どもがいきいきと表現する姿や手立てを更新していくものとする。

また、研究協議会のもちかたも工夫し、教師一人ひとりが自分の考えや思いを表出し、お互いに共有しながら共同研究を深めていく。

授業実践の一例
国語科「あったらいいな、こんなもの」
第二学年
〇目標
＜知識及び技能＞
身近なことを表す語句の量を増やし、文章の中で使っているとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにする。
＜思考力、判断力、表現力等＞
話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつ。
＜学びに向かう力、人間性等＞
見通しをもって学習し、進んで、相手に伝わるように話す事柄の順序を考え、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

本単元では、自分が考えたものを友達に分かるように説明するという場面を設定している。話し手としては、「丁寧な言い方と普通の言い方のどちらを使うとよいか考えて話すこと」、聞き手としては「相手の考えを詳しく聞くために、大事なことは何かを考えて質問すること」が活動の中心となる。相手や場を意識させ、自己評価、相互評価させながらねらいとする力を身に付けさせるように授業を組み立てた。

また、自分にとって、あったらいいなと思うものについて、友達と対話する。「あったらいいなと思うわけ」「はたらき（できること）」「形や色、大きさ」といった観点を、子どもに意識させるために、どんなことを伝えたいか、何を伝えれば相手が分かりやすいかを具体的に考えた。聞き手は、その観点に沿って質問をしたり、納得したりしながら、話し手があったらいいなと思うものを具体的な形にしていった。

３　実践の成果

授業実践を通して、「自分らしくいきいきと表現する子」の具体的な姿を一人ひとりが明確に持ち、共有することができた。その姿を実現するための単元構想や授業実践を通して、効果的であった場の設定や教員の具体的なかかわり方を共有することができた。授業後の協議会は、ラウンドスタディという形態で行った。ラウンドスタディは、６つのラウンドで構成され、ラウンドごとに異なる教員と意見を交換する。一つの授業を多くの教員が参観する時、その視点は様々ある。一人ひとりの教員のとらえた様々な視点が言葉となり、結ばれたり意味付けられたりする。その結果、新しい発見や集合知が学び合いのプロセスの中で生み出される。

４　今後の展開

「自分らしく　いきいきと表現する子
～伝えたくなる場・かかわりづくり～」の研究主題の元、自分なりの表現の仕方で相手に伝えたり、友だちの思いを受け取ったりしながら、いきいきと学ぶ場を作っていきたい。そのために、教員間での情報共有や意見交換を活発に行うことが大切である。

また、子どもが「自分らしくいきいきと表現」するためには、子ども同士の関係、子どもと教師との関係が良好なものでないとできない。基盤となる学級が、子どもも教師も居心地の良い安定したクラスである必要がある。一人ひとりが表現したいという思いを高められるよう、子どもが安心できる学級を作っていきたい。その上で、自分らしくいきいきと表現する授業づくりを意識して取り組んでいきたいと考えている。